卒業研究制作の中間報告書テンプレート

**東京国際工科専門職大学学外秘**

Template for Progress Report on Graduation Research and Graduation Production

東京国際工科専門職大学　情報工学科　新宿 太郎　Taro SHINJUKU (TK210000)

（指導者：情報工学科　教授　新宿 三郎）

# はじめに（または緒言）

必修科目「卒業研究制作」の中間発表に先立って提出する課題（シラバス記載の「中間課題」）として，中間報告書の作成・提出を求める．

中間報告書は本テンプレート内で指定したフォーマット（詳細は表１および図1を参照）に従って執筆すること．内容については，各節の名称や順序は必要に応じて変更したり追加したりして構わないが，求められている内容が不足しないように十分注意すること．特に，「本文」として表１に指定していることに深く留意すること．つまり、文章なしで図面で説明しようとすることは避けること．

中間報告書（と卒業論文・卒業制作報告書）は，レポートの書き方について記述されたガイド（例えば[1]など）を参考に，正確で論理だった文章で作成すること．

「１．はじめに」では，実施しようとしている研究・制作の概要と，前提となる背景事情を説明する．参考文献を活用して根拠データを含めた客観的な記述すること．科学的な根拠がない市場規模やサービスの普及状況の根拠としては，政府の白書（[2]など）や特定の企業の直接的営利目的に従っていないとされる市場分析結果に基づくこと．また，教科書に記載されるほど人類において共有化されている知識（例：三平方の定理など）については，参考文献は不要である．つまり，1種類の例外を除いて，1文たりとも根拠のないこと，論理的ではないことは記述できない．その1種類の例外とは，本人の考え（主張したいこと）を表す場合である．なお，本人（や共同研究者・指導者）が測定した科学的データを根拠とすることは可能である．

なお，研究の概要と背景事情の記述順序は逆になっても構わない．著者の主張が通りやすい順序で記述してよい．

表 1書式の概要

|  |  |
| --- | --- |
| 項目 | 説明 |
| 用紙サイズ・枚数 | A4　1～2ページ |
| 余白 | 上下…18 mm　 左…表20 mm，裏10 mm 右…表10 mm，裏20 mm |
| 文字サイズ | 本文は原則として9ポイント．見出しなどはテンプレートファイルに従うこと．フォントは，可能ならば，Universal Designを考慮したものが望ましい。 |
| 図表 | 図表には必ず個別の連番と題をつける．図題は図の下，表題は表の上に記述する． 題および図表内の説明は日本語または英語を用いる．両方同時には求めない．  図表内の文字が小さすぎて読めない状態は避けること． |
| 表題 | 12ポイント以上の文字を使用し，日本語題・英語題の順に中央に書く． |
| 氏名 | 研究室名と氏名（日本語＋英語）を右寄せで書く．学籍番号も記載する． |
| 本文 | 文章は2段組とし，中央に1.0 cmの空白を設ける．また，1ページあたりの文字数が片段26字（または左右8.5 cm）×60行×2列＝3,120字程度となるように，文字間隔ならびに行間隔を設定すること． |
| 句読点 | 文章中の句点は　．　読点は　，　を使用する．（引用箇所は原著に従っても良い） |
| 参考文献 | 文献は末尾にまとめること．  本文中の引用箇所には適切な引用マークを記載すること． |
| そのほか | その他の詳細は，指導教員に相談すること． |

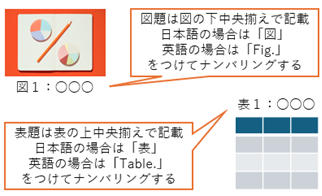


図1 図と表のタイトルのつけ方

1. **研究目的（あるいは研究テーマ）・制作目的（あるいは制作テーマ）**

「研究目的（あるいは研究テーマ）」「（制作目的（あるいは制作テーマ））」では，本研究・制作において何を達成しようとしているのか（課題），その課題を解決しようとするアプローチ，達成目標と得られる成果物を明確に記述する．

あわせて，ターゲットすなわち研究成果・制作成果のベネフィット（利益）を受けるもの（人・企業・国・人類全体など）を明確にし，その研究成果・制作成果によってどのようなベネフィットが得られる見込みであるかを明確にする．

当然であるが，「１．はじめに（または緒言）」で記述された背景事情から導き出される課題であること，また，アプローチも「１．はじめに（または緒言）」で記述された内容から妥当であることが，著者以外に，理解できること，さらに，成果物とベネフィットについても，「１．はじめに（または緒言）」を読めば妥当であることが，著者以外に，理解できることが必須である．

特に，卒業制作においても，本節は重要であり，単純に「作りたいから作る」は許されない．

1. **前提知識（あるいは背景知識）**

研究内容の理解および議論に特別な（目安としては，義務教育～IPUTの同学科同コース学生が授業で習う範囲を超える部分）知識が必要となる場合は，「３．前提知識（あるいは背景知識）」として整理する．

特別な知識を必要としない場合は，本節ごと省略して構わない．

1. **研究計画（制作計画）**

「研究目的（あるいは研究テーマ）」「制作目的（あるいは制作テーマ）」で示した達成目標を実現し，成果物を得るために必要な「今後行うべき活動」とそのスケジュール（予算・日程・必要な機材や人の確保）と「卒業研究制作」における（想定）到達点を具体的に，詳しく述べる．

スケジュールについては著者の「がんばります」のような「精神的なやる気」ではなく，計画の妥当性が伝わるように記述すること．また，到達点も「できる限りやります」という無制限（上限無定義）記述ではなく，○○まで行い，「研究目的（あるいは研究テーマ）」「制作目的（あるいは制作テーマ）」で記述したベネフィットとの関係も明確にすること．

1. **おわりに（または結言）**

最後に報告のまとめや，研究・制作を完遂した後のさらなる展望について述べる．

既に実施済みの研究成果・制作物などがある場合は「おわりに」の前に節を立てて記述して構わないが，中間発表では評価対象外である．

1. **参考文献や謝辞について**

卒業研究制作においては，引用する文献（データ含む）は，適切に引用する．これは本報告書も，最終的に提出する卒業論文・卒業制作報告書も同じである，そのために、最後に「参考文献」リストをつけること．リストの記載方法は，日本学術会議協力学術研究団体[[1]](#footnote-1)（情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、日本ロボット学会、日本デジタルゲーム学会など）が決めているものであれば，いずれの団体の規程に従ったものでもよい．このテンプレートの最後には情報処理学会論文誌の規程に従ったものを示す．

なお，卒業論文や卒業制作報告書においては，謝辞を書くことが多いが，中間報告書については謝辞が必要なければ記述する必要はない．データや環境などを既に提供を受けており，本研究・制作において謝辞を利害関係と合わせて明確にする必要がある場合は記述する。

参考文献

[1] 岡本 健ほか. ゆるレポ: 卒論・レポートに役立つ「現代社会」と「メディア・コンテンツ」に関する40の研究，人文書院 (2021)

[2] 総務省: 情報通信白書令和6年度版，総務省 (2024)

1. https://www.scj.go.jp/ja/group/dantai/index.html [↑](#footnote-ref-1)